

- (Tokyo/Kyoto, 1982), 109–126, Lecture Notes in Math., 1016, Springer, Berlin, 1983.
- [40] (with Saito, Shuji), *Unramified class field theory of arithmetical surfaces*, *Ann. of Math.* (2) 118 (1983), no. 2, 241–275.
- [41] *Galois cohomology of complete discrete valuation fields*, Algebraic K-theory, Part II (Oberwolfach, 1980), pp. 215–238, Lecture Notes in Math., 967, Springer, Berlin-New York, 1982.
- [42] *Symmetric bilinear forms, quadratic forms and Milnor K-theory in characteristic two*, *Invent. Math.* 66 (1982), no. 3, 493–510.
- [43] *A generalization of local class field theory by using K-groups. I, II, III*, *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo Sect. IA Math.* 26 (1979), no. 2, 303–376; 27 (1980), no. 3, 603–683; 29 (1982), no. 1, 31–43.
- [44] *A generalization of local class field theory by using K-groups. I, II*, *Proc. Japan Acad. Ser. A Math. Sci.* 53 (1977), no. 4, 140–143; 54 (1978), no. 8, 250–255.

博士（フランス文学）パリ・ソルボンヌ
 大学塩川徹也氏の『パスカル考』に対す
 る授賞審査要旨

塩川氏は、パリ第四大学（ソルボンヌ）の第三期課程博士論文『パスカルと奇跡』をパリ、ニゼ書店から一九七七年に出版したが、同氏はそれ以後も一貫してパスカル研究を継続してきた。本『パスカル考』（岩波書店、二〇〇三年二月）は、これら一連の研究成果を前提としたパスカル研究の総括とも言うべき著書である。

本書の中心部分は二つの焦点をもっている。一つはパスカルが生前計画した『キリスト教護教論』の構想と意味にかかわっている。もう一つは、信者と教会、および教会のすべての決定を支持する世俗の共同体（国家）との三者関係を問うものである。

「護教論の戦略」の章においては、次の問題が検討される。「私とは憎むべきものだ」という有名な一句を断想の中に残したパスカルが、なぜ『護教論』において「私」を頻繁に登場させ、この「私」の名において語るのか。塩川氏は、この「私」は、自らの個人的省察を語るパスカル自身の「私」ではなく、虚構された「私」である

と主張する。すなわち、人が信仰にいたるまでの内面の「劇」が、「模擬実験」としてそこで展開されている、というのである。塩川氏は、問題の「私」が、サロモン・ド・チュルティールという架空の人物の「私」に擬せられているという点に注意を喚起する。しかもこの「私」のうちには、時としてパスカル自身の心に、神が語りかけたその声が響きわたり、その時パスカルは預言者の役割を果たしている、と、塩川氏はいくつかの断章に即して例証する。

塩川氏はさらに、「護教論の限界」の章において、パスカルの有名な「賭」の問題に踏み出す。「神あり」の立場をとるべきであるか、それとも「神なし」の立場をとるべきであるか。ただし、同氏は、この賭の問題の検討に先立って、『護教論』というこの企てと、その限界についての認識論上の問題を、あらかじめ考察している。この点に関して塩川氏は、パスカル自身の『真空論序言』と『プロヴァンシアル（田舎の友への手紙）』、ならびにアルノー／ニコル共著『ポール・ロワイヤル論理学』の最終部（第四部）後半を徹底的に検討する。

パスカルは、「きみは船に乗り込んでいるのだ」と断定して、賭に参加しない自由を否定する。そこにあるのは、不確実な未来のために働くことが人間の条件に内在している、という直感にほかならない。いずれにしても賭けなければならぬのであるとすれば、自

己の利得に関して、最高最大の賭を選ぶべきではないのか。しかしこの段階に止まる限り、神は最終目的ではなく、自己の幸福実現の手段と見なされているにすぎない。これに対して賭へと誘った虚構の人物は、対話者に向かって、神のためには自我の至高性を放棄せねばならない、と言い、さらに続けて、自分は執筆の前後にひざまずき、「あの無限で不可分の存在」に祈りを捧げていた、と書く。塩川氏はこの護教論者の祈りに関して、「義化〔義認〕をもたらず真の愛が、神を神ご自身のために、いかなる例外もなしに神を全てに優先することがここに確認できる」と主張する。だが、『護教論』が、神の恩寵の領域には立ち入れない以上、その使命は、ここで終わらざるをえない。

しかし塩川氏は、この理性的な賭の理論をテクストを超えて前後から包み込んでいるのは、パスカルの『メモリアル（回心覚え書き）』に記された、パスカル自身への神の現前という神秘的体験、そして祈りによって甦るその記憶であった、と指摘する。ここにもまた、賭に関する従来の解釈——とすれば、数学的論議に、あるいは数理神学の問題を矮小化する傾向に陥りがちな解釈——を超えて、パスカルの思想全体の脈絡のうちに賭の問題を置き直そうとする、塩川氏の独自の鋭い立場が鮮明に示されている。

これに続く「信仰と政治」の章が主題化しているのは、ルイ・

ド・モンタルトの筆名で刊行された十八通の書簡『プロヴァンシア
ル』とその執筆の動機となった、パスカルを含むポール・ロワイヤ
ル派全体に対する、教会と国家による弾圧事件であった。一六四〇
年、ジャンセニウスの遺著『アウグスチヌス』が出版されると、こ
の書物から抜き出したと称する五命題がローマ教皇庁に告発され、
一六五三年には異端宣告を受ける。ポール・ロワイヤルの人々は、
この異端宣告を、「信仰」の領域の問題としては真摯に恭順な態度

を取って、そのまま受け入れるが、この五命題が果たしてジャンセ
ニウスの遺著から引き出されたものかどうか、あるいはそれが彼の
恩寵論を忠実に表現しているかどうか、という「理性」の検討すべ
き領域の問題に関しては、同意することができなかった。塩川氏は、

この問題を厳密に検討し、理性の領域の問題に関するパスカルの論
理が、その後の（例えば、ピエール・ベールの）寛容論にきわめて
近いことを新たに説得的に主張する。同時に、塩川氏はまた、さま
ざまな定義が入り乱れて一致していなかった「ジャンセニスト」の
規定についても、まったく新しい、包括的な定義を提唱している。

本書は、すでに発表されていた諸論文を再編成したものであるた
め、繰り返し箇所、文体上の統一を欠く章、などが散見され、そ
の点が惜しまれる。しかし、これらは表現上の瑕瑾に過ぎず、塩川
氏は、パスカルの基本資料とこれまでのパスカル研究の基本文献と

を深く考究した上で、多くの未解決であった問題に関して、きわめ
て独創的で、しかも読者を納得させうる論証を展開している。

以上の諸理由によって、塩川氏の著作『パスカル考』は、この分
野において世界的水準にある研究として高く評価することができ
る。